

## 平塚ロータリークラブ 会長報告（令和2年5月7日）

平塚ロータリークラブ  
会長 清水 裕

皆さま、こんにちは。

4月7日に発出された緊急事態宣言は、5月4日に延長が決まりました。途中で解除の可能性を残しての宣言ではありますが、厳しい社会状況は今しばらく続くこととなりました。

会員の皆様には、より厳しさが増す中それぞれの会社、組織にてトップとしてのご苦勞如何ばかりかと推察申し上げます。国や県の休業等の支援体制が、もう少しスピーディーに進まないのかとイライラするのは私だけではないと思います。

さて、そのような状況下ではありますが今月より、紙面での例会を試行させて頂くこととなりました。既報の通り

会長報告 幹事報告 委員会報告 地区報告 その他報告 会員メッセージ

などの項目をご報告させて頂き、会員相互の繋がりを少しでも維持させて頂きたく存じます。地元では、商工会議所発の飲食店サポートプロジェクトとして、クラウドファンディングが開始しました。地区では、様々な寄付を模索している半面、通常寄付である財団や米山の寄付状況に苦慮しているようです。また、本クラブでは6月1日の臨時理事役員会にて検討しますが、8グループでも休会決定が相次いでいます。その他、皆さんがお持ちの情報を会員の方々に提供する機会として活用いただければ幸いです。

（忙中閑あり）2020.2.28.「天声人語」より

コロナ禍のなか、手を洗う機会が格段に増えています。薬局に行ってもハンドソープがない、みんな普段は手を洗ってなかったのか、と疑ってしまいます。今回のことも含め感染症予防には、手洗いが必須であることは誰もが知っています。しかし、常識が広まったのはほんの百数十年前の十九世紀半ばのことだったようです。

ハンガリー生まれの産科医ゼンメルワイスが提唱するまで、一般の人どころか医師の間にも手洗いの習慣がなかったそうです。彼は、出産後に高熱に苦しむ産褥熱（さんじょくねつ）の予防に取り組んでいました。そこで注目したのが、医師の手や指の汚れでした。解剖や手術をしたばかりの医師から診察を受けた産婦に患者が多かったからです。同僚に、石鹸での手洗いや爪切り、塩素水の常備を熱心に訴えました。

しかし、病原菌の正体さえわからない時代、「産科医をまるで殺人者呼ばわりしている」と医学界では猛反発を受けてしまいます。失意のうちに亡くなってしまった彼が、「感染防護の父」と呼ばれるようになったのは、死後のことだったようです。

コロナ禍の中、様々な場所で消毒液が用意されています。消毒はいいけど、この容器は誰が触ったかわからないようなあ、なんて疑心暗鬼もとどまるところを知りません。手を洗っても、本当にウィルスが落ちているのか、啄木じゃないですが「じっと手を見る」なんてこともあります。潔癖症とは縁がないはずだったのに、意外と自分が臆病なことに驚いたりしています。

「明けない夜はない」よく最近聞く言葉です。「トンネルを抜けたら、またトンネルだった」なんて皮肉を言う人もいるようですが、いずれにしても皆さんの健康をお祈りしております。お会い出来ることを楽しみに。